

感情を喚起する情報が模擬裁判員の事実認定判断と ネガティブ感情に及ぼす影響

松尾加代

伊東裕司

(慶應義塾大学先導研究センター) (慶應義塾大学文学部)

キーワード：被害者意見陳述・グロテスクな写真・ネガティブ感情

裁判員裁判では多くの情報や証拠が提示される。その中には傷口や死体等のグロテスクな写真や被害者遺族が述べる悲嘆や苦悩の声など、ネガティブ感情を喚起するようなものも含まれ得る。法に素人の裁判員は、これらの情報に直面することによりネガティブ感情が喚起され、提示されたすべての情報を論理的に吟味して認知的判断を行うことが困難になる可能性が考えられる。

グロテスクな写真が判断に及ぼす影響を検討した研究は少数である。例えば、民事裁判を設定した研究で、Whale & Blanchard(1982) は、事故現場の被害者の写真をカラーまたは白黒で実験参加者に提示した後、被害者に対する損害賠償額を決めてもらった。その結果、白黒写真を提示された参加者が判断した損害賠償額よりもカラー写真を提示された参加者が判断した損害賠償額のほうが有意に高かった。刑事裁判を設定した研究では、グロテスクな写真を提示した場合、提示しなかった場合と比べて、有罪判断が2倍になったという報告がある。Douglas, Lyon, & Oglloff (1997) は、実験参加者をカラー写真群、白黒写真群、写真なし群の3つに分け、裁判シナリオを提示した。その結果、写真がカラーまたは白黒に関係なく、写真を提示された参加者の有罪判断の割合が、写真を提示されなかった参加者の2倍高くなった。その他、グロテスクな情報は写真だけでなく、ビデオテープや表現であっても、模擬陪審員の判断を有罪方向に導く効果が報告されている(Bright &

Goodman-Delahunty, 2006; Kassin & Garfield, 1991)。

被害者側による意見陳述はアメリカでは victim impact statements (VIS) と呼ばれ、被害者や被害者遺族が事件によって被った精神的・経済的な被害等について述べるものである。アメリカやカナダの陪審員裁判では、事実認定判断と量刑判断の手続きが2分化されており、VIS は被告人の有罪が決定した後、量刑判断をする際に提示される。そのため、海外での研究ではVIS が量刑判断に及ぼす影響を検討したものがほとんどである(Green, Koehring, & Quiat, 1998; McGowan & Myers, 2004)。例えば、VIS を提示された参加者は、事件のひどさに関係なく、VIS を提示されなかった参加者より多く死刑を選択しており(Luginbuhl & Burkhead, 1995)、VIS が量刑判断に影響を及ぼすことを示している。一方、VIS が有罪・無罪判断への影響を検討したものはほとんどない。Myers & Arbuthnot (1999) の実験では、VIS が有罪・無罪判断に及ぼす影響は認められず、有罪判断率は、VIS を提示された参加者が49.4%、提示されなかった参加者が50.6%であった。しかし、有罪判断をした参加者の中で、量刑判断についてVIS の提示あり・なしを比べたところ、VIS ありの参加者のほうがVIS なしの参加者に比べて、より多く死刑判断を下していた。この実験結果では、VIS は模擬陪審員の有罪・無罪判断には影響を及ぼさないことを示しているが、それを結論づ

けるには、VIS と事実認定判断についての研究数が圧倒的に少ない。

VIS が有罪・無罪判断に及ぼす影響の検討は、手続きが2分化されていない日本の裁判員裁判では非常に重要である。VIS が、他の証拠（事実認定のための証拠）と同じ段階で提示されることから、VIS が裁判員の有罪・無罪判断に影響を及ぼす可能性が考えられる。

VIS やグロテスクな写真が判断に影響を及ぼす理由として、ネガティブ感情の喚起が挙げられている。感情が判断に及ぼす影響は、気分一致判断で説明することができる。気分一致判断とは、ある特定の気分一致した判断を行う傾向のことを指す。Forgas (1994) は、気分一致判断は情報としての感情 (affect-as-information; Clore, Schwarz, & Conway, 1994) もしくは感情プライミング (Bower, 1981) によって起こると論じている。情報としての感情仮説では、喚起された感情が、判断を下すための情報の一部として働き、判断を偏った方向に導くと考える。感情プライミング説では、喚起された感情が、同じタイプの感情に関連している過去の記憶を思い起こさせ、個人はその記憶に基づいて目の前の情報を解釈するため、判断が偏った方向に導かれるとする。

裁判ではどのようなタイプの感情が喚起されるのだろうか。Bright & Goodman-Delahunty (2006) は、グロテスクな写真によって喚起される感情のタイプを調べるために、30 のネガティブ感情を、怒り、悲しみ、嫌悪、恐れ/不安の4カテゴリーに分けた質問紙、Juror Negative Affect Scale (JUNAS) を作成した。そして、実験参加者に裁判シナリオを視聴する前後に JUNAS に回答することを求めた。その結果、グロテスクな写真を提示された参加者は、グロテスクな写真を提示されなかった参加者より嫌悪感を有意に多く感じていた。また被告人に対する怒りも多く感じていた。その他の研究でも、グロテスクな写真が嫌悪や怒りを喚起することを報告している (Douglas, Lyon, & Oglloff, 1997; Feigenson, Park, & Salovey, 2001)。VIS がネガティブ感情の喚起に及ぼす影響についても報告されているものの (Myers & Greene, 2004)、感情のタイプを詳しく調べている研究はごく少数である。Paternoster & Deise (2011) によ

ると、VIS は怒りを強く喚起することを報告している。したがって、VIS やグロテスクな写真が提示されることによって、怒りが強く喚起されるようである。

怒りは反社会感情の一種であり、怒りを感じている個人は、状況よりも人を責めたり、曖昧な情報をネガティブに解釈したり、他者に対して厳しい対応を示したりする (Lerner, Goldberg, & Tetlock, 1998; Lerner & Keltner, 2000; Smith & Ellsworth, 1985; Staub, 2004)。裁判では怒りの感情が喚起されること、そして感情が判断に影響を及ぼすことから、感情 (特に怒り) を喚起した裁判員は、有罪判断の方向に傾くことが考えられる。本研究では、グロテスクな写真と VIS が裁判員の有罪・無罪判断およびネガティブ感情の喚起に及ぼす影響について検討を行った。

方 法

実験参加者

慶應義塾大学の学生 126 名 (男= 37 名 女= 90 名; 年齢 18- 48 歳、 $M = 20.83$) が実験に参加した。実験参加者には謝礼として 1000 円が支払われた。

デザイン

グロテスクな写真の提示 (あり・なし) と VIS の提示 (あり・なし) を要因とする 2 x 2 で実験が行われた。

実験課題

感情の測定: 現在の怒り、悲しみ、嫌悪、恐れ/不安、の4タイプのネガティブ感情 (30 項目) について測定する質問紙 JUNAS (Bright & Goodman-Delahunty, 2006) を用いた。

裁判シナリオ: 南山大学法律学研究会が作成した公判台本を基にして、殺人事件を題材とした裁判シナリオを、新たに作成した。被告人は、一度は自供したものの、後に否認に転じて無罪を主張している設定とした。証拠は状況証拠のみで、被告人を有罪とするには証明力の弱いものばかりが提示された。グロテスクな写真は、被害者役のモデルの腹部に特殊メイクが施されたものを使用した。VIS は、被害者家族の悲しみや被告人に対する憤りの感情、および被害者の学生生活や将来の夢が、被害者の父親によって語られ、被害者の生

前の写真と共に提示された。裁判シナリオは、音声（ナレーション）とパワーポイント（シナリオを文字化）で提示された。シナリオ全体の提示時間は、VIS ありが23分、VIS なしが20分であった。

手続き

参加者は、まず JUNAS に回答（1= まったく当てはまらない、5 = 非常に当てはまる）した。その後、裁判のシナリオが提示された。写真あり群の参加者は、犯行の状況が説明されている間に、犯行現場での被害者の写真が提示された。VIS あり群の参加者は、シナリオの最後に VIS が提示された。再び JUNAS に回答した後、裁判についての質問紙に回答した。質問紙では、有罪・無罪判断、量刑（有罪の場合）、確信度（1 = 絶対無罪、10 = 絶対有罪）、被告人が真犯人である可能性（0% - 100%）、検察の提示した証拠の証明力（1 = 非常に弱い、10 = 非常に強い）に回答した。また、写真あり群の参加者は、写真の衝撃の程度について（1 = まったくショックでない、10 = 非常にショック）回答した。

結果

127 名中、質問紙のすべての質問に回答しなかった実験参加者 15 名を分析から除外した結果、112 名のデータが分析の対象となった。全体では有罪判断が 74 名（66%）、無罪判断が 38 名（34%）であった。有罪判断率についてカイ 2 乗検定を行った結果、グロテスクな写真の主効果は有意傾向であり（ $\chi^2(1, N = 112) = 2.55, p < .10$ ）、VIS の主効果は有意であった（ $\chi^2(1, N = 112) = 3.98, p < .05$ ）。4 群間の有罪判断率についてカイ 2 乗検定を行った結果、有意差が見られた（ $\chi^2(3, N = 112) = 7.17, p < .05$ ）。有罪判断率は、写真あり・VIS あり群で最も高く（78.57%）、ついで写真なし・VIS あり群（71.43%）、写真あり・VIS なし群（67.86%）、そして写真なし・VIS なし群で最も低かった（46.43%）（Table 1）。

確信度、被告人が真犯人である可能性、証拠の証明力について分散分析を行った結果、すべての変数において VIS の効果が見られた（確信度： $F(1, 108) = 5.53, p < .05$ [VIS あり： $M = 7.18, SD = 2.00$; VIS なし： $M = 6.23, SD = 2.25$]、真犯人の可能性： $F(1, 108) = 6.28, p < .05$ [VIS あり： $M = 7.20, SD = 2.04$; VIS なし： $M = 6.13, SD$

$= 2.44$]、証明力： $F(1, 108) = 3.26, p < .10$ [VIS あり： $M = 6.77, SD = 2.00$; VIS なし： $M = 5.98, SD = 2.55$]）。グロテスクな写真の効果、および交互作用はどの変数においても見られなかった。量刑判断について VIS の効果を分析した結果、VIS なし群で死刑を選択した参加者が 16% だったのに対し、VIS あり群では 33% が死刑を選択しており、その比率は 2 倍以上となった。

Table 1.

有罪/ 無罪判断の人数（括弧内は有罪判断率）

	写真あり	写真なし	合計
VIS あり	22/ 6 (78.57%)	20/ 8 (71.43%)	42/14 (75.00%)
VIS なし	19/ 9 (67.86%)	13/15 (46.43%)	32/24 (57.14%)
合計	41/15 (73.21%)	33/23 (58.93%)	74/38 (66.07%)

感情の変化について、全体をペア t 検定で分析した結果、裁判シナリオを提示される前（ $M = 1.56, SD = .51$ ）と提示された後（ $M = 2.35, SD = .81$ ）で有意差（ $t(111) = -10.70, p < .001$ ）があった。この結果より、模擬裁判員は裁判シナリオによってネガティブ感情が喚起されたことが示唆された。シナリオ後の JUNAS の回答を分析した結果、写真あり群（ $M = 2.36, SD = .85$ ）と写真なし群（ $M = 2.33, SD = .77$ ）の参加者の間に有意差は見られず（ $F(1, 108) = .04, ns$ ）、VIS あり群（ $M = 2.51, SD = .79$ ）と VIS なし群（ $M = 2.19, SD = .80$ ）の参加者の間には有意差が見られた（ $F(1, 108) = 4.56, p < .05$ ）。2 要因の交互作用は有意傾向（ $F(108) = 3.88, p < .10$ ）であり、写真の提示がある場合には VIS の効果は見られず、写真の提示がない場合に VIS の効果が見られた（Figure 1）。JUNAS の怒りのカテゴリーについて分析した結果、VIS の主効果がみられた（ $F(1, 108) = 6.99, p < .01$; VIS あり： $M = 2.34, SD = .92$; VIS なし： $M = 1.91, SD = .81$ ）。しかし、写真の主効果および交互作用はみられな

かった (Table 2)。

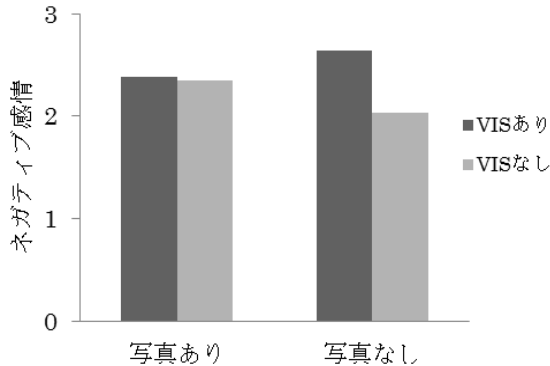


Figure 1. 裁判後 JUNAS のネガティブ感情

考 察

本研究では、グロテスクな写真と VIS の提示が、模擬裁判員の有罪・無罪判断およびネガティブ感情に及ぼす影響を検討した。VIS が判断に及ぼす効果は有意であり、VIS が提示された場合、提示されなかった場合と比べて、有罪判断が多く下された。また VIS が提示された場合の方が、提示されなかった場合と比べて、死刑が多く選択された。一方、グロテスクな写真が有罪・無罪判断に及ぼす効果は有意傾向にとどまり、先行研究の結果と若干の差がみられた。本研究では、特殊メイクによってモデルの腹部に傷を施して撮影した写真を使用した。写真あり群の参加者 56 名に、提示された写真の衝撃度について 10 段階で尋ねたところ、56 名中 41 名が、6 以上を回答したにも関わらず、判断においての写真の効果が有意傾向にとどまった理由としては、模擬裁判自体が実験室内で行われたため、写真に現実味が欠けてしまった可能性

が考えられる。また、先行研究では、実際の裁判で使用された本物の死体写真などを実験参加者に提示していた (Bright & Goodman-Delahunty, 2006) ことも、本研究と先行研究の結果に差が生じた理由の一つかもしれない。さらに別の理由としては、音声での情報提示は個人の想像を制約しないため (Heath, Grannemann, & Peacock, 2004)、写真を提示されなかった参加者は、シナリオを聞きながら、本実験で使用した写真以上にグロテスクな状況を想像していたことが考えられる。

VIS とグロテスクな写真がネガティブ感情の喚起に及ぼす影響については、VIS はネガティブ感情の喚起、特に怒りの喚起に影響を及ぼすことが示された。しかしグロテスクな写真については、ネガティブ感情、怒りともに影響がみられなかった。これらの結果から、VIS はネガティブ感情の喚起と有罪判断に影響を及ぼすことが示された。またグロテスクな写真がネガティブ感情に及ぼす影響が有意でなかったことは、写真の有罪・無罪判断に及ぼす影響が有意傾向にとどまった理由の一つになり得るかもしれない。

グロテスクな写真は、事件の酷さの程度を知るためには有益な情報であるが、被告人の有罪を示すものではない。そして VIS も、被告人の有罪・無罪について影響すべきではない情報である。実際の裁判では、グロテスクな写真や VIS が提示される事態が想定されるが、それらの提示が模擬裁判員の判断およびネガティブ感情に影響を及ぼす結果が見られた本研究は、応用性においても意義深いものとなった。

Table 2. 裁判後 JUNAS の怒りカテゴリーの平均値 (括弧内は標準偏差)

	写真あり	写真なし	合計
VIS あり	2.17 (.89)	2.51 (.93)	2.34 (.92)
VIS なし	2.00 (.74)	1.82 (.87)	1.91 (.81)
合計	2.08 (.82)	2.16 (.96)	2.12 (.89)

引用文献

- Bower, G. H. (1981). Mood and memory. *American Psychologist*, 36, 129-148.
- Bright, D. A., & Goodman-Delahunty, J. (2006). Gruesome evidence and emotion: Anger, blame, and jury decision-making. *Law and Human Behavior*, 30, 183-202.
- Clore, G., Schwarz, N., & Conway, M. (1994). Affective causes and consequences of social information processing. In R. Wyer & T. Srull (Eds.), *Handbook of social cognition* (2nd ed., vol. 1, pp. 323-417). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Douglas, K., Lyon, D., & Ogloff, J. (1997). The impact of graphic photographic evidence on mock jurors' decisions in a murder trial: Probative or prejudicial? *Law and Human Behavior*, 21, 485-501.
- Feigenson, N. R., Park, J., & Slovey, P. (2001). The role of emotions in comparative negligence judgments. *Journal of Applied Social Psychology*, 31, 576-603.
- Forgas, J. P. (1994). The role of emotion in social judgments: An introductory review and an Affect Infusion Model (AIM). *European Journal of Social Psychology*, 24, 1-24.
- Greene, E., Koehring, H., & Quiat, M. (1998). Victim impact evidence in capital cases: Does the victim's character matter? *Journal of Applied Social Psychology*, 28, 145-156.
- Heath W. P., Grannemann, B. D., & Peacock, M. A. (2004). How the defendant's emotion level affects mock jurors' decisions when presentation mode and evidence strength are varied. *Journal of Applied Social Psychology*, 34, 624-664.
- Kassin, S. M., & Garfield, D. A. (1991). Blood and guts: General and trial specific effects of videotaped crime scenes on mock jurors. *Journal of Applied Social Psychology*, 21, 1456-1472.
- Lerner, J. S., Goldberg, J. H., & Tetlock, P. E. (1998). Sober second thought: The effects of accountability, anger, and authoritarianism on attributions of responsibility. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 563-574.
- Lerner, J. S., & Keltner, D. (2000). Beyond valence: Toward a model of emotion-specific influences on judgment and choice [Special issue: Emotion, cognition, and decision making]. *Cognition and Emotion*, 14, 473-493.
- McGowan, M. G., & Myers, B. (2004). Who is the victim anyway? The effects of bystander victim impact statements on mock juror sentencing decisions. *Violence and Victims*, 19, 357-374.
- Myers, B., & Arbuthnot, J. (1999). The effects of victim impact evidence on the verdicts and sentencing judgments of mock jurors. *Journal of Offender Rehabilitation*, 29, 95-112.
- Myers, B., & Greene, E. (2004). The prejudicial nature of victim impact statements: Implications for capital sentencing policy. *Psychology, Public Policy, and Law*, 10, 492-515.
- Paternoster, R., & Deise, J. (2011). A heavy thumb on the scale: The effect of victim impact evidence on capital decision making. *Criminology*, 49, 129-161.
- Smith, C. A., & Ellsworth, P. C. (1985). Patterns of cognitive appraisal in emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 813-838.
- Staub, E. (2004). Basic human needs, altruism, and aggression. In A. G. Miller (Ed.), *The social psychology of good and evil* (pp. 51-84). New York: Guilford Press.
- Whalen, D.H., & Blanchard, F. A. (1982). Effects of photographic evidence on mock juror judgment. *Journal of Applied Social Psychology*, 12, 30-41.